



## 日本・韓国・台湾における結婚移住女性のメンタルヘルスに関する研究動向

著者	一條 玲香, 上埜 高志
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	65
号	1
ページ	47-70
発行年	2016-12-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00065103">http://hdl.handle.net/10097/00065103</a>

# 日本・韓国・台湾における結婚移住女性の メンタルヘルスに関する研究動向

一 條 玲 香\*  
上 埜 高 志\*\*

本稿では、日本・韓国・台湾における結婚移住女性のメンタルヘルス研究について文献レビューを行った。1) 韓国・台湾における研究では、英語、日本語で書かれた21件の論文を対象とした。2) 日本における研究では、精神科を受診した外国人患者に関する研究、外国人全般に関する研究、結婚移住女性に関する研究、DV被害女性に関する研究、外国人母親に関する研究から34件の文献を対象とした。

その結果、1) 韓国・台湾の研究では、概ね結婚移住女性のメンタルヘルスは現地女性よりも良好ではないことが示されていた。研究上の特徴として、対象者が韓国や台湾と経済格差がある国出身者に限られていること、使用されている尺度・指標が多様であり、研究の信頼性や妥当性に課題があることがわかった。また2) 日本における研究は、韓国・台湾の研究と比較して、大規模な量的調査がほとんど行われていないこと、母子保健の領域に研究が偏っていることが明らかとなった。

**キーワード：**結婚移住女性、外国人女性、メンタルヘルス、異文化ストレス、国際結婚

## I 問題と目的

### 1 研究の背景

2016年末現在、日本に在住する外国人は、223万2189人と過去最高に達した（法務省、2016b）。日本の総人口が減少傾向にある（総務省統計局、2015）一方で、日本で暮らす外国人は漸増傾向にあり、中でもニューカマーである一般永住者は増加し続けている（法務省、2011；法務省、2016a）。さらに年間約1万人が日本に帰化している（法務省、2016c）。彼・彼女らは、在留外国人統計からは消えてしまうため、日本で暮らし外国にルーツをもつ人は公表されている在留外国人数を大きく上回ることが想定される。

日本で暮らす外国人を在留資格別に見ると、オールドカマーである特別永住者を除き、一般永住者、定住者、日本人の配偶者といった帰国を前提としない外国人が45%、約半数を占める（法務省、2016b）。そのうち女性は61%にのぼる。落合・カオ・石川（2007）によると、外国人単純労働者の長期滞在を厳格に制限している日本では、新規流入外国人に占める婚姻移動の割合が高いという。日

---

\*教育学研究科 博士課程後期

\*\*教育学研究科 教授

本における国際結婚は、妻が外国人の婚姻件数が約71%を占めている（厚生労働省, 2016）。これらのことから、ニューカマー定住外国人の特徴として、日本人男性と結婚した外国人女性が浮かび上がってくる。

日本における結婚移住女性の抱える困難や適応は、80年代後半以降に農村に嫁いだ「農村花嫁」、「外国人妻」の問題として報告されてきた（武田, 2011；賽漢卓娜, 2011；佐竹・ダアノイ, 2006；宿谷, 1988）。また精神医学的視点から、ストレスや適応の問題を抱えることなどが多く指摘されている（五十嵐, 1995；桑山, 1995a）。しかしながら心理学的視点に立った異文化研究では、外国人留学生に関する研究が最も蓄積のある分野であり、結婚移住女性に関する研究が非常に少ないのが現状である。

## 2 目的

そこで本稿では、日本・韓国・台湾における結婚移住女性の精神的健康、ストレスに関するこれまでの研究を整理することを目的とした。韓国・台湾では、近年日本以上に国際結婚が増加しており、心理学的研究も盛んにおこなわれていることからこれらの地域を含めることとした。日本における結婚移住女性のメンタルヘルスに関する研究は、一條(2012)においてまとめているが、新たな資料を加えて考察を行うこととする。

## 3 用語の定義—結婚移住女性

本稿では、日本人男性と結婚した外国出身女性を結婚移住女性とし、日本に帰化した外国人女性も含める。結婚移住女性 (marriage immigrant women)、結婚移民 (marriage immigrant) は、経済的に豊かな国の男性と結婚する場合に用いられることもある。また日本では、過疎高齢化の進む地方において、経済格差を背景として仲介型国際結婚した外国人女性に用いられている場合もある。このような使用例において、結婚移住女性は、「農村花嫁」、「外国人花嫁」、「外国人妻」といったステレオタイプ化<sup>1</sup>したイメージと結びついている。しかしながら、国の経済格差を根拠に結婚を経済目的と断定することも、自由恋愛だからといって経済目的ではないと断定することも困難である。また自由恋愛か経済目的かで結婚を分けることで、石井(2005)は、「経済的な目的目当てで結婚した人を『不純な』『本来の形でない』結婚として、周縁化する傾向を持っている」と指摘する。さらに、どのような経緯で結婚したかに関わらず、異文化で生活することはストレスフルなことであるし、もし結婚経緯によってメンタルヘルスの状態や適応が異なるのであれば、研究対象を限定したままでは、比較検討を行うこともできない。したがって本稿では、単に日本人男性と結婚した外国出身女性という意味で用いることとする。

## Ⅱ 研究1 韓国・台湾における結婚移住女性のメンタルヘルス研究

### 1 はじめに—アジアにおける「国際移動の女性化」と結婚移住女性

小ヶ谷(2013)によると、アジア域内における女性の単身国際移動は、1980年代中頃からアジア

NIEs<sup>2</sup>の経済力上昇を受け、特に家事労働者の移動を中心に「移動の女性化(feminization of migration)」を大規模に引き起こしてきた。「単身で移動するのは男性であり、女性はその後に呼び寄せられる家族移民である」という移民理論の定説をくつがえすような状況が、とりわけアジアにおいて急速に出現するようになった。

「国際移動の女性化」は、女性の国際移動が量的に増えただけでなく、質的にみると、行く先々で女性移住者が担う活動や役割は家事、子育て、高齢者ケア、看護といった分野に集中しており、国際結婚の場合にも家族形成に深くかかわっている(伊藤, 2008)。「国際移動の女性化」はグローバリゼーションの過程がモノやサービスの生産領域だけでなく、生殖やケア労働といった人間の再生産領域にまで深く食い込んできていることの表れである(伊藤, 2008)。日本では、移住家事労働者の導入はされなかったものの、80年代以降、大量の「ホステス(＝エンターテイナー)」がフィリピン、タイなどから来日し、これと並行してアジア諸国出身女性との国際結婚も増加した(伊藤・足立, 2008)。この国際結婚の傾向は、韓国や台湾でもみられる。

Kim (2010)によると、韓国では、90年代半ばから、韓国人男性と経済的な安定を求める外国人女性の結婚が増加し始め、90年代後半に急増した。韓国人男性と外国人女性との婚姻は、都市部よりも、農漁村地域を含む地域の占める比率が高く、2009年、韓国内で婚姻した農林漁業に従事する韓国人男性の35.2%が外国人女性と婚姻しており、そのうち農漁村地域に限っては、38.7%とさらに高い数値になっている(自治体国際化協会ソウル事務所, 2011)。また国籍別では、2009年の韓国男性と外国人女性との婚姻のうち、中国(45.2%)、ベトナム(28.8%)、フィリピン(6.5%)の順であり、3カ国が占める比率は80.6%で大部分を占める(自治体国際化協会ソウル事務所, 2011)。国際結婚の増加に伴い結婚移住女性のDV被害や健康領域において言語的・文化的問題を抱えることが浮き彫りとなってきた(Kim, 2010)。韓国政府は、2007年に「在韓外国人処遇基本法」を、2008年には、「多文化家族支援法」を制定し、保健福祉家族省による3年毎の実態調査、差別や偏見の防止と多様性を認める土壌づくり、多文化家族への情報提供や教育支援を推進していくことの必要性が盛り込まれた(尹・朴・鄭・金・中嶋, 2012)。

また台湾では、90年代以降中国大陆、東南アジア系女性と台湾人男性との結婚が増加し、2003年には結婚全体の約3割を占めた(横田, 2008)。国籍別では、1987年から2007年までの累計で、中国、ベトナム、インドネシアの順に多い((横田, 2008)。ウ(2010)は、結婚移住女性は家庭内問題と社会的問題に直面するとし、家庭内問題として、言語障壁と文化的差異、結婚当事者の教育レベルの低さ、経済的脆弱性、家庭内不和と権力の不均衡、地域社会との隔絶、育児と教育があり、社会的問題として偏見を挙げている。台湾政府は、「外籍興大陸配偶照顧輔導措施」(外国籍および中国籍配偶者ケア・指導対策)を取り、2005年より10年間、予算を組み、結婚移住者の適応指導教室や語学教室、子ども支援を進めている(横田, 2008)。2005年から2008年の施政方針に結婚移住者の生活適応、言語教育、関連する特別研究、親教育、法律支援などが盛り込まれ、予算がつけられた(ウ, 2010)。

このような状況を背景として、近年、韓国や台湾において、結婚移住女性のメンタルヘルスに関する研究が行われている。

## 2 方 法

論文検索ツール EBSCO host を用いて, 「MEDLINE」, 「Academic Search Premier」, 「CINAHL」から, 検索式「women or female」「immigrant\*」「married or marriage」「stress or anxiety or depression or mental」で文献を抽出し, 研究対象や内容, 地域(韓国・台湾)を吟味した。また抽出した文献の引用リストなどからも文献を抽出し, 英語もしくは日本語で書かれた文献21件(韓国10件・台湾11件)を対象とした。それぞれの研究の規模や用いられている尺度について表1にまとめた。尺度は, 人口学的な指標や言語能力を除き, メンタルヘルスの指標とその他の指標に分けた。標準化されていない指標は, 具体的な内容あるいは文献内の引用をそのまま記した。

## 3 結 果

### 1) 韓国における結婚移住女性のメンタルヘルス研究

メンタルヘルスを測る指標はさまざまであるが, 多くの研究が現地の女性よりも移住女性の方が悪い状態にあると結論付けている (Im, Lee, & Lee, 2014; Kim, Yang, Kwon & Kim, 2011; Kim & Kim, 2013; Lee, Park, Hwang, Im & Ahn, 2014)。抑うつに関連のある変数として, 生活満足度 (Kim & Kim, 2013), 文化変容ストレス (Kim & Kim, 2013; Kim, Kim, Moon, Park & Cho, 2013), 韓国語能力 (Kim et al., 2011; Kim & Kim, 2013; Kim et al., 2013), 結婚満足度 (Kim et al., 2013), 世帯構成 (Kim et al., 2013), 家族からのサポート (Kim et al., 2011), 出身国, 死産経験, 健康認知, 食事を抜くこと, 運動 (Kim, Yang, Chee, Kwon & An, 2015) が挙げられている。また精神的健康では, 「家族・近隣の人々に対する否定的感情」と「経済的逼迫感」(尹他, 2012), 結婚満足度 (Lee et al., 2014) が関連する変数であった。

結婚移住女性のストレスに関する研究も行われており, ストレス尺度は家族, 親, 文化, 経済の4因子から構成されることが明らかにされている (Park, Yang & Chee, 2016)。ストレスに影響を与える変数として, 韓国語能力, 経済力の違いによりストレスに差が生じていた。

産前ケアとソーシャルサポート, ストレスに関する研究 (Kim, Choi & Ryu, 2010) や心理的問題と不適切な食事の関連を指摘した研究 (Hwang, Lee, Kim, Chung & Kim, 2010) も行われている。

### 2) 台湾における結婚移住女性のメンタルヘルス研究

Yang & Wang (2011a, 2011b) は, 結婚移住のベトナム人女性と台湾人女性の HRQL (Health-related quality of life) の比較をおこない, ベトナム人女性の健康状態が良好ではないことを明らかにし, 身体的健康よりもメンタルヘルスの方が良くないことを報告している。Shu, Lung & Chen (2011) も精神障害が疑われる人の割合は, 台湾女性よりベトナム, インドネシア女性の方が高いとする。一方, Chou, Chen, Liu, Ho, Tsai, Ho, Chao, Lin, Shen & Chen (2010) の研究では, 結婚移住女性と現地女性の QOL と抑うつの比較した結果, 大うつエピソードを持つ割合は, 現地の女性と比べて, 結婚移住女性の方が低く, QOL も高かった。この結果は, 先行研究の結果と異なるとした上で, その要因について, 第一により過酷な状況から逃れて移住してきたためストレスを低く評価した可能性があること, 第二に出身国でのうつ病率が低いこと, 第三に台湾政府の支援の成果, 第

表 1 韓国・台湾における結婚移住女性のメンタルヘルス研究

No	研究	規模 (人)	研究協力者内訳(人もしくは割合)			メンタルヘルス指標	その他の指標
			ベトナム	中国	フィリピン/インドネシア/タイ		
1	Hwang et al. (2010)	570	570			Psychological Well-Being Index-Short Form	Dietary behaviors, Eating practices, Dietary intake, Anthropometric parameters, Blood pressure, Blood profiles
2	Im et al. (2014)	501	169	146		GHQ-28	Culture shock questionnaire (Mumford's), Coping resources
3	Kim et al. (2010)	165	96	44	25		Social support tool (Liabsuetrakul et al. 2007), stress (Cohen et al.1983), practice of prenatal care (Cha, 1999)
4	Kim et al. (2011)	316	37.5%	25.7%	19.0%	CES-D	MSPSS (the Multidimensional Scale o Perceived Social Support)
5	Kim & Kim (2013)	173	49.1%	26.5%		CED-D-K	ASS (Acculturative Stress Scale), Korean language literacy scale
6	Kim et al. (2013)	223	29.7%	35.2%	10.5%	CES-D 10	VIA (Vancouver Index of Acculturation), SAFE (the Social, Attitudinal, Familial and Environmental Acculturative Stress), General stress, Marital satisfaction
7	Kim et al. (2015)	316	118	81	60	CES-D	Health status, Health behaviors
8	Lee et al. (2014)	74	21	15	16	SCL-90-R	
9	Park et al. (2016)	190	73	72	17		SMFMI (Stress measurement of female marriage immigrants)
10	尹他 (2012)	719	267	164	141	GHQ-12	日常生活の苛々感(夫に対する否定的感情、家族・近隣の人々に対する否定的感情、韓国文化に対する否定的感情、社会活動の制約感、経済的逼迫感、コミュニケーション制(隔離))
1	Chen et al. (2013)	203	66	137		EPDS (Edinburgh Postnatal Depression Scale)	Social assimilation, Social attitude, Social support
2	Chen et al. (2013)	1001			(都市582, 地方419) 男女含む(女性約96%)	BSRS-5 (Brief Symptom Rating Scales)	Self-rated physical health, Social support
3	Chou (2010)	94	37	41		CHQ-12, TDQ (Taiwanese Depression Questionnaire)	RAPM (Raven's Advanced Progressive Matrices)
4	Chou et al. (2010)	801	417	119	167	DRPST (disaster- related psychological screening test)	MOS SF-36 (Medical Outcomes Study Short Form-36)
5	Huang & Mathers (2008)	106	92		14	EPDS (Edinburgh Postnatal Depression Scale)	
6	Kuo et al. (2013)	485	215	144	43	CHQ-12	EAAMC
7	Lin & Hung (2007)	143	143			BDI - II (Beck Depression Inventory II)	Life Adaptation Scale, Social Support Scale (APGAR)
8	Shu et al. (2011)	129	45	43	41	CHQ-12	EPQ
9	Yang et al. (2010)	203	203			DISD (Demand of Immigration Specific Distress)	
10	Yang & Wang (2011a)	203	203			SF-36-V2 (The 36-item Short Form Health Survey-Version2)	SL-ASIA (Suim-Lew Asian Self-Identity Acculturation)
11	Yang & Wang (2011b)	203				SF-36-V2	

韓国

台湾



四に比較対象にバイアスがあった可能性を述べている。

人口学的変数との関連では、居住年数、子の数、婚姻状況、教育レベル、配偶者の宗教、配偶者の雇用状況、文化変容レベルがメンタルヘルスに関連することが指摘されている (Yang & Wang, 2011b)。

Kuo, Chang, Chang, Chou & Chen (2013) は、文化変容態度 (分離・同化・統合・周辺化の4類型) の台湾版を用いて、ベトナム人がフィリピン人より分離が多いこと、夫が一時雇用者であるほど、周辺化されやすいこと、教育レベルが高い人ほど統合傾向にあることを明らかにした。

Lin & Hung (2007) は、生活適応とソーシャルサポート、抑うつとの関連について検討を行ない、ソーシャルサポートと生活適応度に正の相関が、ソーシャルサポートと抑うつ、生活適応度と抑うつに負の相関があることを明らかにした。個人属性との関連では、滞在年数、結婚年数、夫の年齢とソーシャルサポートの間に正の相関があり、使用言語、夫との出会い、居住形態によってソーシャルサポートに差が、また収入によって、抑うつ度と生活適応度に差がみられたとしている。

都市と地方の結婚移住者の比較研究 (Chen, Shiao, Lin, & Lin, 2013) によると、身体的健康で、都市と地方の差はみられなかったが、メンタルヘルスでは地方の方が不良であった。また地方ではソーシャルサポートがメンタルヘルスと身体的健康のキーとなる一方で、ソーシャルサポートに加え、文化変容度、社会経済的地位、家族構造が都市の移住者にとって重要であることを明らかにしている。

また母親 (Chou, 2010) や産後うつ (Chen, Hwang, Tai & Chien, 2013; Huang & Mathers, 2008) といったテーマでも調査が行われている。結婚移住の母親の70%は心理的問題を抱え、24%が抑うつ状態にあり、この調査では、人口学的変数のうち滞在年数だけが抑うつを予測する変数となった (Chou, 2010)。同書は、出身国に対する差別や偏見、家庭内での文化的衝突や孤独を経験することで、滞在年数が長くなるにつれて、自虐的、孤独になるとし、自文化からの長期間の分離とソーシャルサポートの欠如が抑うつと滞在年数の長さに関連づけているとする。

産後うつとの関連では、結婚移住女性の産後うつは現地の女性より高いこと (Huang & Mathers, 2008)、産後のソーシャルサポートは、直接的、間接的に産後うつを軽減することが指摘されている (Chen, Hwang, Tai & Chien, 2013)。

#### 4 考 察

韓国、台湾における結婚移住女性のメンタルヘルス研究の特徴として、研究対象者の特異性を指摘できよう。韓国、台湾における結婚移住女性研究は、社会経済的な現象である「国際移動の女性化」を背景として盛んに行なわれるようになってきた。したがって、当然のことながら研究対象者は、韓国、台湾よりも経済力が低い国あるいは地域、出身の結婚移住女性たちということになる。欧米における異文化間結婚の研究 (Kahn, 1997) や当事者たちの体験 (大沢, 1989) を参照すると、異文化間結婚において心理的困難を抱えるのは、経済格差のある国や地域出身の女性たちに限ったことではない。しかしながら、韓国、台湾における研究は、グローバル経済というコンテキストにおける

結婚移住女性を扱っているため、欧米出身の結婚移住女性は含まれず、主に経済格差のあるアジア出身の女性が対象となっている。

結婚移住女性のメンタルヘルスの状況について、多くの研究は、通常の状態あるいは産後いずれにおいても現地の女性よりも良好ではないと結論付けている。メンタルヘルスとの関連要因について、さまざまな変数が検討されている。結婚移住女性のメンタルヘルス関連要因を表2にまとめた。

結婚移住女性のメンタルヘルス関連要因は、6つの領域に分けられた。第1に結婚以前の要因、第2から4に、本人、夫、家族の属性、第5に言語能力、そして第6に心理尺度である。心理尺度には、ストレス（異文化・一般）、変容・適応度、満足度（生活・結婚・QOL・苛々感）、ソーシャルサポートなどがある。

一方で研究手法上の課題として、韓国における研究レビューをおこなった Nho, Park, Kim, Choi & Ahn (2008) も指摘するように、それぞれの研究で使われている尺度や指標が多様であり、またそれらの翻訳手続きが適切に行われているか示されていない場合もある。対象の属性や規模も様々であり、条件が統制されていない研究もあることから、変数の影響については慎重にならなければならないだろう。

表2 メンタルヘルス関連要因

項 目	
移住以前	夫との出会い
本人の属性	出身国 滞在年数 教育レベル
夫の属性	年齢 雇用形態 宗教
家族の属性	世帯構成（二世帯か一世帯か） 結婚年数 子の数 経済状況
言語	外国語能力
尺度	ストレス（一般・異文化） 文化変容度 生活適応度 満足度（生活・結婚・QOL・苛々感） ソーシャルサポート

### Ⅲ 研究2 日本における結婚移住女性のメンタルヘルス研究

#### 1 はじめに—日本における結婚移住女性研究

日本で異文化を扱う心理学は、1970年以降、課題や方法が多様化し、70年代後半には、大別すると外国旅行の影響、在日留学生、文化学習法、カルチャー・ショックといったテーマが取り上げられてきた（渡辺・大塚, 1979）。80年代から90年代初期にかけての在日外国人の精神保健に関する文献レビューでは、対象者は中国帰国者（中国残留邦人で日本に帰国した人）である日本人の配偶者や



留学生が多いこと、研究者の所属機関は医療・保健機関が最も多く、臨床現場のニーズが高いことが指摘されている(岡田・李, 1995)。留学生については、多くの報告や研究がなされている(高井, 1989; 譚・渡邊・今野, 2011)。一方、結婚移住女性のメンタルヘルスを直接あつかった研究は少なく、病院を受診した外国人患者に関する研究、在住外国人全体もしくは女性を対象とした研究、DVに関する研究、外国人母親に関する研究の対象者として含まれている場合がある。したがって本節では、これらの研究から日本における結婚移住女性のメンタルヘルスについて整理するものとする。

## 2 方 法

精神科を受診した外国人患者に関する研究は、「CiNii Articles」において、「外国人, 精神」と検索したところ、181件の論文が抽出された。このうち外国人労働者や日本人医療関係者を主たる対象としたものを除き、外国人女性について言及している論文を抽出した。抽出された論文の引用から、さらに論文を抽出し、8件の論文を対象とした。

外国人女性に関する研究は「CiNii Articles」において、「外国人, 女性」と検索したところ、424件の論文が、「外国人, 母親」と検索したところ、49件の論文が抽出された。このうち、日本国内における在住外国人女性を対象とした研究で、女性労働者が中心であるものを除いた。つぎに心理学、医学、看護学、社会福祉学、社会学、日本語教育学といった分野からメンタルヘルス、外国人に関連する論文を抽出した。結婚移住女性当事者に調査をおこなっている研究で、メンタルヘルスや適応、ソーシャルサポート、満足度などが調査のテーマあるいは、従属変数となっているものを基準に選定をおこなった。なお、内容から婚姻関係において日本人以外と婚姻関係にある外国人女性が主な対象となっている研究は除いた。さらに該当論文の引用などから、論文を抽出し、最終的に27件の研究が抽出された。

## 3 結果と考察

精神科を受診した外国人患者に関する研究と外国人女性に関する研究を表3, 4にまとめた。

### 1) 精神科を受診した外国人患者に関する研究

病院を受診した外国人患者の研究から、属性や症状、病名、誘因などを知ることができる。本節では、外国人患者の特徴についてまとめた後、女性患者の特徴についてまとめることとする。

大西・大滝・中山・清水(1987)は、1976年から1985年にかけて東京慈恵医大付属病院精神科を受診した外国人患者67例(男41, 女26)について実態調査を行った。対象例を旅行者群、留学・ビジネスなどの一時滞在群、既婚者や永住権を持つ永住群に分け考察を行っている。年齢は30代が最も多く、半数前後が精神科既往歴を有していた。また半数近くが救急例であり、これは外国人精神患者の特徴の一つであるとしている。永住者群は、初期には国際結婚などでの夫婦間の葛藤などを背景として発症するパターンと家族内力動の変化や個人の複雑な要因が絡み合い、来日20年～30年経ってから発症するパターンが見られた。さらに大西・中川・小野・檜山・野賀(1993)では、1986年以降の6年間に受診した外国人患者との比較を行っている。依然高い割合ではあるが、救急例が43%か

表3 精神科を受診した外国人に関する研究

研究者	研究方法	調査地域	対象	規模(人)	主な出身国	主な診断名
阿部・比賀 (2004)	症例検討	東京	患者	80(男38, 女42)	ラテンアメリカ	気分障害
江畑(1988)	症例検討	東京	救急事例	26(男15, 女9)	米国(5例)	精神分裂病 反応性精神病 躁うつ病
許(2010)	症例検討	福岡	患者	女3	中国・フィリピン・ペルー	—
稲川他(1993)	症例検討	静岡	患者	49(男20, 女29)	ブラジル・フィリピン	心因反応 神経症圏
大西他(1987)	症例検討	東京	患者	67(男41, 女26)	中国・台湾 韓国・北朝鮮 米国	心因反応 躁うつ病 神経症
大西他(1993)	経時比較	東京	患者	68(男37, 女31)	うち6名日本人 中国、台湾、中国、 台湾、	躁うつ病 精神分裂病 神経症
大西他(1995)	症例検討	東京	症状が強く なった15例	15(男2, 女13) うち6名日本人	日本人以外は 中国, 台湾, 韓国	—
辻丸・福山 (2003)	症例検討	福岡	患者 (東アジア除外)	12(男8, 女4)	北米・中南米	—

表4 外国人女性に関する研究

	研究	対象者	方法	地域	規模(人)	主な出身国	主なテーマや変数
外国人女性全般	深谷 (2002)	集団健康診断 の外国人	質問紙	神奈川	110 女性45.8%	フィリピン・ 日系ブラジル	ストレス・抑うつ・ ソーシャルサポート
	平野 (2001)	在住外国人	質問紙	九州・山口	278 うち女性163	フィリピン・ ペルー・中国	生活満足度 社会的支援 精神的健康度
	木村 (1998)	既婚女性	質問紙・ 面接	—	172	フィリピン・ ラテンアメリカ	生活問題・ソ シャルサポート
	Ozeki et al. (2006)	学生の年代	質問紙	全国	143 うち女性67	第一言語が 英語・中国語	ストレス・精神的 健康度・女性
結婚移住女性	桑山 (1995a)	日本人の 配偶者	症例検討	山形	4	フィリピン・ 韓国	外国人花嫁
	松本 (2001)	日本人の 配偶者	質問紙	関東・東海	135	フィリピン	孤独感・不安感
	王(2005)	日本人の 配偶者	質問紙	都市・農村	50 うち女性33	中国	国際結婚
	鈴木 (2012)	日本人の 配偶者	半構造化面接	東京近郊	20	アジア10名 欧米10名	異文化適応
DV被害者女性	林田・片岡 (2008)	妊婦(患者)	事例研究	東京	1	東南アジア	DV
	松本 (2004)	DV問題を抱 える日本人の 配偶者	面接調査	—	5	フィリピン	DV
	仲里 (2015)	DV／離婚問 題を抱える日 本人の配偶者	半構造化面接	沖縄	4	フィリピン	DV

	研究	対象者	方法	地域	規模(人)	主な出身国	主なテーマや変数
外国人母親	浅海他(2011)	未就学児をもつ日本人の配偶者	質問紙	—	19	—	育児ストレス・精神的健康・自己開示
	藤原・堀内(2007)	日本での出産経験者	半構造化面接	東京	9	アジア・欧米	出産
	橋本他(2011)	日本で出産・子育てを経験者	半構造化面接	—	18	ブラジル・フィリピン・中国・ペルー・ベトナム	妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略
	橋爪他(2003)	被疑者	精神鑑定	—	4	韓国・タイ・ブラジル	出産・育児
	今村・高橋(2004)	小2までの子がいる日本人の配偶者	半構造化面接	首都圏	36	フィリピン	育児ストレス・ソーシャルサポート
	蛭崎(2009)	日本で妊娠・出産した中国人母親	面接	農村	8	中国	妊娠・出産時における日本人家族との関係構築プロセス
	川崎・相原(2012)	日本で出産を経験し学童までの子どもを育てた中国人母親	半構造化面接	首都圏	8	中国	育児の困難と対処プロセス
	李他(2015)	乳幼児をもつ中国人母親	半構造化面接	石川県	20	中国	妊娠・出産・育児の困難と支援
	南野(2016)	国際離婚し、就学児のいる母親	面接	—	7	フィリピン	育児・ネットワーク
	石ら(2004)	外国人産褥婦	質問紙	福岡	33	中国・韓国	出産
	鶴岡(2008)	日本で初めて出産・子育てした日本人の配偶者	面接	—	3	中国・韓国・フィリピン	2国間のジレンマと対処
	魏(2015)	日本で子育て経験のある日本人の配偶者	面接	—	8	韓国・タイ・中国・インドネシア・ブラジル	育児・ネットワーク
	山中・中村(2013)	母親	半構造化面接	大阪市	9	韓国・フィリピン	ソーシャルネットワーク・ソーシャルサポート
	楊・江守(2010)	6歳までの子供がいる中国人母親	質問紙	関東	132	中国	育児ストレス
	吉田他(2009)	日本で子育てする日本人の配偶者であるフィリピン人母親	グループ面接	—	8	フィリピン	育児困難・対処
	鄭(2006)	在日中国人家庭	半構造化面接	関西	19	中国	在日中国人家庭の育児形態

ら22%へ減少し、神経症やうつ病などの患者が積極的に受診するようになり、女性が増加傾向にあることなどがわかった。また医療上の問題だけでなく、経済や法律上の問題が解決をより一層複雑にしていることを指摘している。

静岡県西部地域における外国人精神科受診者の調査を行った稲川・渥美・星野・宮里・大原(1993)では、永住者の受診者には、女性が多いこと(55%)、永住者では、身体症状で来院する例が多いと報告されている。

阿部・比賀(2004)は、外来を受診した在日ラテンアメリカ人80名について分析を行っている。発病の契機として多文化間葛藤(17名)が最も多く、次いで夫婦間葛藤(15名)、職場葛藤(12名)、失恋(6名)、対人葛藤(4名)、家族間葛藤(2名)、交通事故(2名)であったとする。女性の場合、診断は、気分障害(64.3%)が際立って多く、背景として仕事と家事の両立があり、ほとんどが夫婦間葛藤や家庭内葛藤を抱えていた。また身体症状の併発も比較的多くみられたという。

国際結婚例における患者についての考察(大西・山寺・中山, 1995)でも、身体症状の訴えの多さが特徴としてあげられる。身体症状は、更年期障害や老化現象の一部として捉えられるが、うつ病を伴うものなどは背景に、コミュニケーションの問題が考えられるとしている。また国際結婚の夫婦が老いるにつれ、子どもの日本社会への適応による親の孤独や経済的基盤の脆弱性が背景として指摘されている。ただし、この考察には、国際結婚した日本人も含まれている。

精神科救急事例の24例を調査した江畑(1989)によると、来日前発症群において10例中6例が治療中断による再発と考えられ、日本語能力の欠如や文化摩擦が主な誘因となった事例はなかった。また来日後発症群においては、6か月以内の場合、国外に滞在することに関連した誘因が認められ、11か月以降になるとより日常レベルの問題が関連していることがわかったが、言語障壁や文化摩擦が主な誘因となったとは考えられなかったとしている。

辻丸・福山(2003)は、1983年から2001年までに久留米大学病院の精神科を受診した外国人(12例)について検討を行った。ただし、この研究では、多文化間ストレスをより鮮明にするためとして東アジア人は除外されている。移住のストレスに脆弱であるとされる思春期世代と老人、主婦の事例がみられた。また精神科既往歴を有する事例が複数あり、直接異文化ストレスが影響したと考えられないものと異文化ストレスが誘因と考えられるものの両方があった。精神科の問題として、コミュニケーションの困難が指摘されている。同じ久留米大学病院の精神科を受診した外国人を対象とした研究では、許(2010)が既婚外国人女性の3例を挙げている。これらの事例では、出産というライフイベント、育児ストレス、頼れる人との別れ、日本語能力の不足が発症に関与していることが指摘されている。

以上、病院を受診した外国人の特徴として、精神科既往歴を有するものが一定数いること、急患例が多いこと、女性の患者が増加傾向にあること、神経症やうつ病の患者が増えていること、身体症状の訴えが多いことなどが挙げられる。その背景としてコミュニケーションの問題や異文化ストレスが考えられるが、それらが直接的な誘因ではないケースも見られた。長く滞在するほど、言語や文化といった問題だけでなく、家族の問題やライフイベントといったより日常生活での葛藤など

複雑な背景があると考えられる。

外国人女性患者の特徴として、増加傾向にあること、国際結婚などの長期滞在者の中にも患者がいることがわかった。症状では身体症状が、診断では、気分障害が多い。その背景として、夫婦間葛藤、家庭内葛藤、更年期障害、コミュニケーションの問題、出産や子の自立といったライフイベントなどが指摘されている。外国出身者の抱える問題として、真っ先に目を向けられるのはコミュニケーション、言語の問題であるが、結婚移住女性のメンタルヘルスを考える場合には、言語だけでなく、日常生活やライフイベント、老化にも着目して行く必要があるだろう。

## 2) 外国人女性全般に関する研究

Ozeki, Ushijima, Knowles & Asada (2006)は、精神健康度調査票 (GHQ30)を用いて、在日外国人女性の異文化ストレスの要因とメンタルヘルスの状態について調査を行った。調査協力者は、第一言語として英語もしくは中国語を話す者で、大学を通じて質問紙が配布されたため、学生もしくは大学関係者が多く含まれていたものと思われる。結果として、女性は男性よりもメンタルヘルス上ハイリスクであり、年齢が高くなるほどストレスを感じていた。特に「孤独」「ホームシック」「来日してからの不安増加」がストレス要因となることが明らかとなった。

一方、平野 (2001) では、精神的健康、社会的支援において男女差はみられなかったと報告されている。生活不満足度の「日常生活の情報が少ない」において男女差がみられ、男性が女性よりも高く、不満に感じていた。深谷 (2002) でも文化変容ストレス、ソーシャルサポート、抑うつ度に男女差はみられず、文化変容ストレスと教育レベル、滞在年数との関連、および抑うつレベルと教育レベル、帰属サポート、文化変容ストレスとの関連が示された。

滞日外国人女性を対象とした研究 (木村, 1998) では、質問紙とインタビュー調査によって、心理社会的問題と就労形態が調査され、社会的支援についての提言がなされている。調査協力者は、主にフィリピンとラテンアメリカ系の20代と30代の既婚女性であった。高いレベルのストレスを示す項目として、「(本国と離れているゆえの)寂しさ」、「病気になったときの心配」、「問題が起こったときの相談先がわからない」といった項目が挙げられた。ソーシャルネットワークに関しては、友人として同じエスニック背景をもつ友人と日本人が半々であること、地理的に近い場所が交流の場になっていることが明らかになった。また日本での長期滞在におけるニーズとして、日本語学習のプログラムが挙げられた。

以上の研究をまとめると、3つの研究のうち、1つでは女性のほうがハイリスクであると指摘されている。ストレスが高い項目として、寂しさや孤独、ホームシックといった孤立感や不安感があること、抑うつとストレス、ソーシャルサポートに関連があること、日本人と同国人どちらともネットワークをもっているといったことが明らかにされている。

## 3) 結婚移住女性に関する研究

王 (2005) は、日中国際結婚の満足度・適応度・サポートの必要度の検討を行っている。日中国際結婚をした中国人を対象とし、都市・男性、都市・女性、農村・女性の3郡に分けて考察を行った。満足度は、経済以外の人間関係・交流・文化体験・言語の4領域において、農村・女性より都市・女性、



都市・女性より都市・男性が有意に満足していた。適応度は、人間関係、異文化適応、心身健康・情緒、ストレス・すべての領域において、都市・女性の方が農村・女性より適応度が高く、人間関係、心身健康・情緒、ストレスの3領域では、都市・男性の方が都市・女性よりも適応が高いことがわかった。サポートの必要度に関しては、生活環境・文化風俗領域において農村・女性が都市・女性よりも、都市・男性が都市・女性よりもサポートを必要としていることがわかった。これらの結果から農村・女性が最も好ましくない状況に置かれていることが示唆された。

松本(2001)は、フィリピン人妻を対象に夫婦関係の調査をおこなった。「家庭内での孤独感」と夫への要望項目である「在日友人との交流」、「一緒に外出」との間に中程度～強い相関があること、「夫との生活に対する不安感」と夫への要望項目である「母国家族との交流」との間に中程度～強い相関がみられた。このことから、夫との関係では、夫が在日コミュニティとのつながりを持ったり、一緒に外出する人ほど孤独感が少なく、夫が母国の家族と交流をもっている人ほど不安が少ないことが明らかとなり、フィリピン人妻は、夫と自分の友人や家族が交流することを望んでいることが示唆された。

鈴木(2012)では、日本人男性と国際結婚した外国人女性へ半構造化面接を行い、異文化適応と精神的健康について調査を行った。多くの国際結婚研究が、アジア出身者に偏る中、この研究では、半数が欧米出身者であった。過半数が現在の生活に満足している一方で、6割が心配事、不安、悩みを抱えており、夫にかかわる事柄が目立ったとしている。日本社会の問題として、男性優位・女性蔑視、アジア蔑視、仕事中心、画一性などがストレスの原因となっており、特にアジア出身者は、アジア蔑視を、欧米出身者では仕事中心を問題としていた。

結婚移住女性の研究の中で、いわゆる「外国人花嫁」の精神的問題について取り上げたものがいくつかある(桑山, 1994, 1995a, 1995b, 1998; 五十嵐, 1995)。「外国人花嫁」とは、1985年に行政主導により始められた外国人女性との集団お見合いによって注目を集めた。彼女たちは、言葉も通じないまま、簡単なお見合いを経て、嫁不足に悩む日本の農村に嫁ぎ、このような結婚は、「お見合いツアー結婚」として社会問題となった(宿谷, 1998)。韓国や台湾で多くみられる研究同様に、経済的格差を背景とした、主にアジア諸国出身女性との結婚に着目した研究である。精神科医として彼女たちと関わりをもった桑山は、時間の経過に伴うストレスの山場を、不安、怒り、疲労、ホームシック、アイデンティティをキーワードに分析した(桑山, 1995a, 1998)。その他のストレスとして、桑山(1995b, 1998)は季節的・周期的なストレス、宗教・言語をめぐるストレス・日本人家庭内でのストレスを挙げている。また五十嵐(1995)は、地域の日本語教室は、単なる語学の習得だけではなく、「外国人花嫁」たちが抱える悩みを訴える場となっていることを報告している。

結婚移住女性に関する研究をまとめると、農村に嫁いだ外国人女性のメンタルヘルスのリスクが高いといえる。ストレスでは、夫婦間葛藤や家庭内葛藤に加え、社会の問題として、男尊女卑、アジア蔑視、仕事中心、画一性などが指摘されている。サポートとして、夫との関係を深めることや日本語学習および日本語学習を通じた人との交流などが挙げられている。



#### 4) DV に関する研究

当事者に対する調査は少ないものの、DV（ドメスティック・バイオレンス）に関する研究や報告がいくつかおこなわれている。欧米の研究（Dickerson & Frydenlund, 2013; Noorfarah, 2008）でも指摘されているように、結婚移住女性が配偶者に頼らなければならないという社会制度がDVの背景にある。国際結婚の場合、在留資格の問題、自立することの困難さや子どもの親権を巡る問題などからDVが顕在化しにくく、またDVを受ける生活から抜け出すことが難しい（仲里, 2015; 李, 2004; 林田・片岡, 2008）。松代（2004）は、一般的なDVの形態に加えて、国際結婚の場合、法的立場を利用した暴力、文化的暴力、言葉の差別があると指摘する。また金・津田（2015）は、支援団体への調査を通して、結婚移住女性側の課題として社会資源利用のノウハウ不足とアフターケア継続の困難さを挙げている。

林田・片岡（2008）は、DVから逃れてきた外国人妊婦の事例について報告しており、DVによる妊娠・出産、および精神的健康への重大な影響があったとしている。また松本（2004）は、フィリピン人DV被害女性の事例から、サポート源としてはじめに自国の友人や教会といったパーソナル・ネットワークにつながり、その後ソーシャル・ネットワークにつながり、民間のシェルターや社会福祉施設に落ち着くというプロセスを明らかにしている。

外国人女性のDVの場合、社会制度の問題、ジェンダーの問題、マイノリティの問題、経済的問題など複雑に絡んでいる。李（2004）が指摘するように、このようなハイリスクな状態にある外国人女性であれば、なおさら心身への影響が大きいことは想像に難くない。外国人女性のDVに関する研究では、被害者女性を対象とした研究は少なく、被害女性のメンタルヘルスよりも主に背景や社会的支援といった視点から論じられている。

#### 5) 外国人母親に関する研究

結婚移住女性に関する研究の中で、最も蓄積があるのは外国人の母親に関する研究であろう。異文化ストレスについて研究レビューをおこなった歌川・丹野（2008）は、45.9%が在日外国人女性の妊娠・出産・育児に関する母子保健研究であったとする。外国人母子は日本人母子に比べて、周産期リスクが高いグループであることが指摘されている（平野, 2003）ため、母子保健に関する研究が多いことが推察される。もちろん外国人母親には、日本人男性と結婚した結婚移住女性に限ったものではないが、多くの研究において、結婚移住女性が含まれている。

分娩直後の心理状態について日本人女性と比較した研究では、心と体の健康状態・不安度・自律神経症状・抑うつ状態において、いずれも外国人女性の方が日本人よりも有意にスコアが高く、分娩直後の心理状態が日本人に比べ不良であることが明らかとなっている（石・石・高橋・坂井・吉田・柏村, 2004）。出産において、コミュニケーションの不成立や異文化の環境への戸惑いから、出産体験が孤独感と疎外感の強い体験となることも指摘されている（藤原・堀内, 2007）。

妊娠・出産・育児において外国人母親の問題として、鶴岡（2008）は、外国人母親が日本文化を選択することで母国文化に従うことができないことから、ジレンマが生じているとした。李・木村・津田（2015）は、言葉や習慣の違い以外に中国人母親の問題として、『家族からの子育て支援のバリ

ア』、『母親への精神的な影響』があることを明らかにした。言葉や文化の問題だけでなく、日中間における夫の育児休暇取得率の違いや子育て支援として親族を呼び寄せる困難さ、仕事と育児の両立の難しさからキャリアへの不安など社会制度やジェンダー感の違いが問題を生じさせているとする。中国社会と比較して日本は共働き率が低く、母親に育児が任される傾向にあることや親族の育児サポートが得られにくいこと(楊・江守, 2010; 鄭, 2006)も指摘されている。また子どもが成長してくると、子どもが母親よりも日本語や日本文化に精通するようになり、母親の地位が低められることで葛藤が生じるという報告もある(吉田・春名・大田・渡辺・Uayan・松島, 2009)

橋爪・小島・佐藤・蓑下・浅川・森田・中谷(2003)は、女性外国人被疑者の精神鑑定4事例を通して、異文化での出産・育児は、文化による育児法の違いや言葉の問題など家族間に葛藤を生じさせる要因となること、さらに母親役割を負うことによって日本社会への一層の適応を強いられることに注目し、これらのことが精神障害の発症と犯罪の背景になりうるとした。

育児ストレスのメンタルヘルスへの影響について、浅海・安庭・野島(2011)は、未就学児をもつ外国人母親に質問紙調査を行い、日本人母親と比較をおこなった。育児ストレスや精神的健康(身体的症状を除く)に大きな差はみられなかったが、外国人母親の方が夫への自己開示が高く、外国人母親にとって話し相手として夫が重要な存在であることが示された。また日本人母親では育児ストレスの多くの下位尺度と精神的健康に相関がみられたが、外国人母親の場合には、一部にしか相関がみられず、外国人母親の精神的健康は育児ストレス以外にも多くの影響を受けていると結論付けている。

今村・高橋(2004)も、育児ストレスとソーシャルサポートという視点から、外国人母親と日本人母親との比較を行っている。外国人母親・日本人母親ともに、母親の精神健康度に最も影響する要因は、育児ストレスの中の育児困難感であった。また両群を比較した場合、外国人母親のほうが日本人母親よりもより強固なソーシャルサポートを持っており、育児ストレスが低いことが明らかになった。つまり外国人母親の場合、ソーシャルサポートによって、育児ストレスが緩和されていることがわかった。しかしながら、一部の外国人母親の中には、抑うつ得点が高いハイリスク群が存在していた。

外国人母親のソーシャルサポートについて、山中・中村(2013)は、日本への移住に伴いソーシャルネットワークの再構築を迫られること、情理的サポートは知り合い程度関係でも受けられる一方で、交際的・情緒的サポートは親しい人とのつながりから、実質的な子育てに関する道具的なサポートは家族から受けていることを明らかにした。

外国人母親の子育てネットワークの特徴として、自身の親族ネットワークの欠如、夫の役割の重要性、子の成長によるネットワークの縮小、拡大家族における家族外ネットワークの欠如が指摘されている(魏, 2015)。またジェンダーに起因する夫や夫家族からの制限や干渉によりネットワークの発展が妨げられることも示されている(南野, 2016)。

橋本(2011)では、ソーシャルサポート以外の対処方略について、「やり過ごす」というネガティブな方略が取られていることを明かにした。このような方略を取る場合、リスクが高くなる恐れがあ

り、エスニックコミュニティを通じた情報発信や医療従事者の積極的な介入が必要であるとしている。

妊娠・出産・育児のプロセスに着目した研究では、日本人家族との関係の変化や異文化適応プロセスとの関連が指摘されている。蛸崎(2009)によると、妊娠期は、異文化や日本家族への溶け込み時期と重なること、日常の役割の軽減や免除が暗黙の合意の下に行われる特別な時期であることから、日本人家族との問題が表出しにくい。一方で、産褥期には、習慣の差が大きくなることから、家族の役割期待に差が生じ、互いに柔軟に対応できない場合には、問題が表面化することがあるとしている。

川崎・麻原(2012)は、中国人母親は、日本人母親をモデルとするモデリングから日本と中国の文化特性をもつ考え方や行動の仕方などを身につけ、新たな自己の枠組みを持つ母親になる(mothering)経験をしているとした。また中国人母親が育児で遭遇する困難に対処するプロセスにおいて、異文化適応のプロセスと同様の現象が起っており、育児の過程で自文化の再統合と日本の文化との共生を図り、異文化適応していることが明らかとなった。

以上、外国人母親のメンタルヘルスについてまとめると、妊娠・出産・子育てにおいて、言語、文化、ジェンダー観、制度の違いにより様々な問題が生じることが明らかとなっている。日本人母親と比較して育児ストレスは高くないが、ソーシャルネットワークの構築に困難や制約があり、妊娠・出産・子育てに関わるソーシャルサポートは家族とくに夫に偏っているという特徴がみられる。一方で、妊娠・出産・子育てというプロセスを通して、日本人家族との関係構築や異文化適応もおこなわれている。

#### 4 考 察

研究の視点として、ストレスなどの問題や困難の分析、育児とストレス、ソーシャルネットワーク、ソーシャルサポート、国際結婚における異文化への適応、DV などがある。彼女たちの抱える困難として、言語の問題やホームシックがあることがわかった。とくに外国人女性は、男性よりもメンタルヘルス上ハイリスクであり、農村部の女性のほうがさらにリスクが高いことが示された。

またDV 被害について、結婚移住女性は、社会制度の問題、ジェンダー問題、マイノリティ問題、経済的問題からリスクが高く、DV 被害が顕在化しにくく、逃げ出しにくいという状況が明らかになっている。その他のリスクが高まる機会としては、妊娠・出産・育児が挙げられる。妊娠・出産・育児を通して、日本社会へのさらなる適応が求められるからである。これらのリスクは、ソーシャルサポートによって軽減する。サポート源は、主に夫や同じエスニックグループである。しかしこのようなサポートが得られない場合には、日本社会からの積極的な働き掛けが必要とされるということが明らかになっている。

研究上の特徴として、質問紙調査では、フィリピン出身者が多く、全体数では多い中国や韓国出身者を対象とした研究が少ないということが指摘される。また首都圏での研究が多く、地方で点在して暮らしている外国出身者に関する研究はあまりみられない。地方では、同じエスニックグループのサポートを受けられるとは限らない。このような状況で、外国出身者はどのように地域に適応

してくのかという視点が必要である。

また韓国や台湾と比べて、量的調査が少なく結婚移住女性のメンタルヘルスの全体像がつかめていない。精神的健康はどのような状態にあるのか量的には捉えられておらず、まずは標準化された指標をもってメンタルヘルスの状態を捉えることが必要である。そうした上で、ストレスやサポートの関連を量的に検討することで、より具体的な対策や支援を考えることが可能になる。

事例研究、特に症例検討においては、医療モデルといった研究の性質上、原因・問題追求型の研究に偏っている。日本の異文化適応研究は、実のところ「異文化不適応研究」ではないかと指摘される(歌川・丹野, 2008)ほど、問題に主眼が置かれている。問題がどう解決されていくのか、解決に目を向けていく必要があるだろう。近年、ネガティブな影響や問題に焦点を当てるのではなく、人間の強みや長所に着目するという新たな方向性が注目されている(Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)。これまでの研究では、当事者の経験や語りの分析から、当事者の問題解決能力について十分に検討されてきたとは言い難い。そこで当事者の経験や語りに着目することで、問題解決の示唆を得ることが可能になるだろう。

また結婚移住女性のメンタルヘルスとライフイベントの関連が指摘されているが、原因・問題追求型の研究では、問題が起こる過程までしか捉えていない。結婚移住女性のような長期居住者の場合には、長い異文化生活のなかで、様々なライフイベントがあり、また大小さまざまな危機的状況が起こりうると考えられる。ライフストーリーの視点から、そのようなプロセスを捉えることで、よりマクロな視点に立った異文化適応過程がみえてくるだろう。今後、日本は超高齢化社会を迎える。高齢化していくのは、日本人に限ったことではない。来日初期や出産、子育て期だけに着目した研究ではなく、より包括的、マクロな視点に立った異文化適応研究が必要であるといえる。

#### IV 総合考察

韓国、台湾での結婚移民女性に関する研究は、英語と日本語の文献に限ったことではあるが、量的分析が蓄積されつつあり、結婚移住以前の要因、本人、夫、家族の属性、言語能力、ストレス(異文化・一般)、変容・適応度、満足度(生活・結婚・QOL・苛々感)、ソーシャルサポートとメンタルヘルスの関連が指摘されている。また結婚移住女性のメンタルヘルスは、現地女性と比べて良好ではないことが明らかとなっている。一方で、韓国、台湾における研究は、グローバルな経済格差を背景とする主にアジア諸国出身の結婚移住女性しか対象としておらず、欧米などその他の国出身の結婚移住女性のメンタルヘルスについては検討されていない。結婚経緯や国家間の経済格差、グローバルな社会における文化的ヒエラルキーは、結婚移住女性のメンタルヘルスに影響を与える要因となる可能性はあるだろう。しかしアジア諸国出身者だけに、対象が絞られていることで、このような要因の量的な検討はなされていない。また異文化において、文化葛藤やストレスを抱えるのは、アジア諸国出身者に限ったことではない。より対象者を広げた包括的な結婚移住女性のメンタルヘルス研究が必要とされる。また尺度や指標が多様であり、研究の信頼性や妥当性には課題が残る。

日本における結婚移住女性の抱える問題は、以前から様々な分野において指摘されていた(五十

嵐, 1995; 桑山, 1995; 武田, 2011; 賽漠卓娜, 2011; 佐竹・ダアノイ, 2006; 宿谷, 1988)。しかしながら心理学的研究において、外国人留学生に関する研究が最も蓄積のある分野であり、結婚移住女性に関する研究は非常に少ないことが指摘できる。留学生や労働者と異なり、組織に属さない日本人配偶者などの外国人は、量的に捉えにくく、小規模な質問紙、事例、外国人患者を中心に研究が行われており、母子保健に関する研究が最も多かった。

韓国・台湾の研究と比較して日本における研究は、個々の研究が部分的で、在住外国人女性のメンタルヘルスの全体像を捉えた研究がないことが指摘できる。量的研究では、データ数が少ないことから、尺度の検討や変数間の分析はされず、メンタルヘルスとストレス、ソーシャルサポートなどの関係を扱ったものは少ない。また問題が顕在化した個別の事例研究・症例研究が中心であり、いわゆる問題解決にはあまり目が向けられてこなかったことが指摘される。原因追及ではなく、問題解決の視点から事例を検討することで、より現実的な支援を考えることに繋がるのではないかと思われる。さらには、出産や子育てといった一定期間の適応だけでなく、長期的視点に立ち、ライフイベントとの関連から結婚移住女性の心理的適応プロセスを考察する必要があるといえる。

## 付記

「研究2 日本における結婚移住女性のメンタルヘルス研究」は、一條(2012)に新たな資料を加えて、書き換えたものである。また本研究は、公益財団法人上廣倫理財団、平成26年度研究助成を受けました。心より感謝申し上げます。

## 【注】

- 1 日本とアジア諸国との経済格差を利用して農村男性の結婚難を解消するために行われた「売買婚」であり、お金のために日本人と結婚した「かわいそうな女性」と女性の人格を尊重しない日本人男性といった否定的な言説(武田, 2011)。
- 2 Newly Industrializing Economies「新興工業経済地域」韓国, 台湾, 香港, シンガポールなどの10か国

## 引用文献

- 阿部裕・比賀晴美(2004). クリニックにおける外国人のこころの支援 こころと文化, 3, 27-35
- 浅海健一郎・安庭香子・野島一彦(2011). 外国人母親の育児ストレスと精神的健康, および自己開示との関連—日本人母親との比較を通して— 九州大学心理学研究, 12, 147-157.
- Chen, H.-H., Hwang, F.-M., Tai, C.-J. & Chien, L.-Y. (2013). The interrelationships among acculturation, social support and postpartum depression symptoms among marriage-based immigrant women in Taiwan: A cohort study. *Journal of Immigrant Minority Health*, 15, 17-23.
- Chen, W., Shiao, W.-B., Lin, B.Y.-J. & Lin, C.-C. (2013). Rural and urban married Asian immigrants in Taiwan: Determinants of their physical and mental health. *Journal of Immigrant Minority Health*, 15, 1038-1047.
- Chou, F.H.-C., Chen, P.-C., Liu, R., Ho, C.-K., Tsai, K.-Y., Ho, W.-W., Chao, S.-S., Lin, K.-S., Shen, S.-P. & Chen, C.-C.



- (2010). A comparison of quality of life and depression between female married immigrants and native married women in Taiwan. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 45, 921-930.
- Chou, W.-J. (2010). Maternal mental health and child development in Asian immigrant mothers in Taiwan. *Journal of the Formosan Medical Association*, 109, 293-302.
- Dickerson, B.J. & Frydenlund, E. (2013). アメリカ合衆国の移民政策と結婚移住女性 中嶋和夫(監) 尹 靖水・近藤理恵(編) グローバル時代における結婚移住女性とその家族の国際比較研究 学術出版会 pp85-93.
- 江畑敬輔(1989). 精神科救急事例となった在日外国人の24自験例の臨床的検討 日本社会精神医学, 12, 145-153.
- 藤原ゆかり・堀内成子(2007). 在日外国人女性の出産—孤独感や疎外感を抱く体験— ヒューマン・ケア研究, 8, 38-50.
- 深谷裕(2002). 在留外国人の文化変容に伴うストレスと抑うつ—新来外国人を中心に— 日本社会精神医学, 11, 11-19.
- 橋本秀実・伊藤薫・山路由実子・佐々木由香・村嶋正幸・柳澤理子(2011). 在日外国人女性の日本での妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略 国際保健医療, 26, 281-293.
- 橋爪きょう子・小島秀吾・佐藤親次・蓑下成子・浅川千秋・森田展彰・中谷陽二(2003). 在日外国人女性の精神鑑定例—異文化葛藤要因としての出産・育児— 犯罪学雑誌, 69, 36-43.
- 林田幸子・片岡弥恵子(2008). DVにより夫から離れることを決断した在日外国人妊婦の事例 聖路加看護学会誌, 12, 33-40.
- 平野(小原)裕子(2001). 九州における在日外国人の精神的健康に関する研究 九州大学医療技術短期大学部紀要, 28, 129-137.
- 平野(小原)裕子(2003). 在日外国人の身体的・精神的健康—保健学・看護学的視点から— 福岡医学会, 94, 241-249.
- 法務省(2011). 平成22年末現在における外国人登録者数について—第2表, 第3図— <<http://www.moj.go.jp/content/000074951.pdf>> (2016年5月17日).
- 法務省(2016a). 平成27年末現在における在留外国人数について(確定値) H27. 12月末(確定値) 公表資料 <<http://www.moj.go.jp/content/001178165.pdf>> (2016年5月17日).
- 法務省(2016b). 在留外国人統計(旧登録外国人統計) 統計表 2015年12月末 <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001150236>> (2016年5月17日).
- 法務省(2016c). 帰化許可申請者数, 帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移 <<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>> (2016年5月18日).
- 許 莉芬(2010). 異文化適応からみた在日外国人のメンタルヘルスに関する研究—久留米大学病院を受診した外国人花嫁の事例を通して— 比較文化研究論集, 25, 17-27.
- Huang, Y.C. & Mathers, N.J. (2008). Postnatal depression and the experience of South Asian marriage migrant women in Taiwan. *International Journal of Nursing Studies*, 45, 924-931.
- Hwang, J.-Y., Lee, S.E., Kim, S.H., Chung, H.W. & Kim, W.Y. (2010). Psychological distress is associated with inadequate dietary intake in Vietnamese marriage immigrant women in Korea. *Journal of the American Dietetic Association*, 110, 779-785.
- 一條玲香(2012). 日本で暮らす外国出身女性のメンタルヘルスに関する展望 山形大学心理教育相談室紀要, 10, 21-29.
- 五十嵐善雄(1995). 外国人花嫁と適応—異文化との接触を巡って— 現代のエスプリ, 335, 85-94.



- Im, H., Lee, K. Y. & Lee, H. Y. (2014). Acculturation stress and mental health among the marriage migrant women in Busan, South Korea. *Community Mental Health Journal*, 50, 497-503.
- 今村祐子・高橋道子 (2004). 外国人母親の精神的健康に育児ストレスとソーシャルサポートが与える影響—日本人母親との比較— 東京学芸大学紀要1部門, 55, 53-64.
- 稲川美也子・渥美智子・星野良一・宮里勝政・大原健士朗 (1993). 在日外国人の適応不全—静岡県西部地域在住外国人の精神科受診者の調査より— 臨床精神医学, 22, 159-166
- 石井香世子 (2005). 再生産労働力としての国境を超えた人の移動—既存研究のまとめ— NUCB Journal of Economics and Information Science, 49, 397-409.
- 伊藤るり (2008). 再生産労働の国際移転とジェンダー秩序の再編—香港の移住家事労働者導入政策を事例として— 伊藤るり・足立眞理子 (編著) 国際移動と連鎖するジェンダー—再生産領域のグローバル化— 作品社 pp21-46.
- 伊藤るり・足立眞理子 (2008). 序文 伊藤るり・足立眞理子 (編著) 国際移動と連鎖するジェンダー—再生産領域のグローバル化— 作品社 pp5-17.
- 自治体国際化協会ソウル事務所 (2011). 韓国における多文化政策の取組み CLAIR REPORT, No. 367 < <http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/367.pdf> > (2016年6月22日)
- Kahn, C. (1997). Four women: Immigrants in cross-cultural marriages. In Elovitz, P.H. & Kahn, C. (Ed) , *Immigrant Experiences—Personal Narrative and Psychological Analysis*, Teaneck: Fairleigh Dickinson University Press, pp. 199-220.
- 蛸崎奈津子 (2009). 農村にて国際結婚した中国人女性の妊娠・出産時期における家族関係構築プロセス 日本看護研究学会雑誌, 32, 59-67.
- 川崎千恵・麻原きよみ (2012). 在日中国人女性の異文化における育児経験—困難と対処プロセス— 日本看護研究学会雑誌, 32, 52-62.
- 金愛慶・津田友理香 (2015). 日本における国際結婚家庭に関する心理社会的支援：在日フィリピン人のDV被害者支援についての一考察 名古屋学院大学論集 社会科学篇, 51, 95-104.
- Kim, G.S., Kim, B., Moon, S.S., Park, C.G. & Cho, Y.H. (2013). Correlates of depressive symptoms in married immigrant women in Korea. *Journal of Transcultural Nursing*, 24, 153-161.
- Kim, H.-S. (2010). Social integration and health policy issues for international marriage migrant women in South Korea. *Public Health Nursing*, 27, 561-570.
- Kim, H.S. & Kim, H.S. (2013). Depression in non-Korean women residing in South Korea following marriage to Korean men. *Archives of Psychiatric Nursing*, 27, 148-155.
- Kim, J.A., Yang, S.J., Chee, Y.K., Kwon, K.J. & An, J. (2015). Effect of health status and health behaviors on depression among married female immigrants in south Korea. *Asian Nursing Research*, 9, 125-131.
- Kim, J.A., Yang, S.J., Kwon, K.J. & Kim, J.H. (2011). Predictive factor of depression among Asian female marriage immigrants in Korea. *Nursing and Health Sciences*, 13, 275-281.
- Kim, Y.A., Choi, S. Y. & Ryu, E. (2010). Social support, stress, and practice of prenatal care in married immigrant women in Korea. *Journal of Transcultural Nursing*, 21, 325-331.
- 木村眞理子 (1998). 滞日外国人女性の定住化—多文化共生に伴う生活問題とソーシャルサポート— 基督教社会福祉学研究, 31, 61-69.

- 厚生労働省(2016). 平成28年我が国の人口動態(平成26年までの動向) <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>> (2016年5月18日)
- Kuo, S.-F., Chang, W.-Y., Chang, L.-I., Chou, Y.-H. & Chen, C.-M. (2013). The development and psychometric testing of East Asian acculturation scale among Asian immigrant women in Taiwan. *Ethnicity & Health*, 18, 18-33.
- 桑山紀彦(1994). 苦悩する外国人花嫁たち—浮かび上がる日本人家族の病理— イマーゴ, 5, 60-73.
- 桑山紀彦(1995a). 国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族— 明石書店
- 桑山紀彦(1995b). 文化の違いが心の世界に及ぼす影響—精神神経科のアプローチがとらえる外国人患者の深き悩み— 看護学雑誌, 59, 1026-1029.
- 桑山紀彦(1998). 外国人花嫁のメンタルヘルス こころの科学, 77, 79-82.
- Lee, S.H., Park, Y.C., Hwang, J., Im, J.J. & Ahn, D. (2014). Mental health of intermarried immigrant women and their children in South Korea. *Journal of Immigrant Minority Health*, 16, 77-85.
- 李節子(2004). 在日外国人女性のドメスティック・バイオレンス被害に対する社会的資源—その現状と課題 財団法人女性のためのアジア平和国民基金委託調査報告書 <<http://www.awf.or.jp/pdf/0160.pdf>> (2016年9月12日)
- 李剣・木村留美子・津田朗子(2015). 石川県に在住する中国人母親の子育て支援に関する検討 金沢大学つるま保健学会誌, 39, 171-179.
- Lin, L.-H. & Hung, C.-H. (2007). Vietnamese women immigrants' life adaptation social support and depression. *Journal of Nursing Research*, 15, 243-254.
- 松本裕子(2001). 国際結婚における夫婦関係に関する一考察—フィリピン妻の意識を中心に— 聖徳大学研究紀要 人文学部, 12, 17-22.
- 松本裕子(2004). 国際結婚とドメスティック・バイオレンス—アジア系外国人女性の事例を中心に— 聖徳大学研究紀要 人文学部, 15, 55-62.
- 松代東亜子(2004). 日本における外国籍女性とドメスティックバイオレンス—アジア人女性への支援現場から— フェミニストカウンセリング研究, 3, 69-80.
- 南野奈津子(2016). 移住外国人女性における国際離婚と子育てに関する研究 法政大学大学院紀要, 76, 61-75.
- 仲里和花(2015). 日比国際結婚のフィリピン人妻のDV・離婚に関する一考察—沖縄県 A 市在住者の事例を通して— 異文化間教育, 41, 95-110.
- Nho, C.R., Park, K.H., Kim, M.Y., Choi, M.J. & Ahn, A. (2008). Trends of studies on Southeast Asian women married to Korean men. EASP 5th Conference. Welfare Reform in East Asia. Paper Session 4, Stream 2 <[http://www.welfareasia.org/5thconference/papers/Nho%20C\\_southeast%20asian%20women.pdf](http://www.welfareasia.org/5thconference/papers/Nho%20C_southeast%20asian%20women.pdf)> (2016年9月2日)
- Noorfarah, M. (2008). Theoretical frameworks for studying female marriage migrants. *Psychology of Women Quarterly*, 32, 281-289.
- 落合恵美子・カオ リー リヤウ・石川義孝(2007). 日本への外国人流入からみた国際移動の女性化—国際結婚を中心に— 石川義孝(編著) 人口減少と地域 京都大学学術出版会 pp. 291-319
- 小ヶ谷千穂(2013). 移動の女性化(フェミニナイズーション) 吉原和男(編者代表)・蘭信三・伊豫谷登士翁・塩原良和・関根政美・山下晋司・吉原直樹(編) 人の移動事典—日本からアジアへ・アジアから日本へ— 丸善出版 pp.140-141.
- 岡田佳詠・李節子(1995). 在日外国人精神保健研究の動向—対応・援助に関する内容の検討を中心に— 日本精神保

- 健看護学会誌, 4, 72-80.
- 大西守・中川種栄・小野和也・檜山俊夫・野賀政史(1993). 在留外国人精神障害者の最近の動向 精神科治療学, 8, 1437-1445.
- 大西守・大滝紀宏・中山和彦・清水信(1987). 在留外国人精神障害者の臨床精神医学的研究 臨床精神医学, 16, 883-890.
- 大西守・山寺亘・中山和彦(1995). 国際結婚例における心身医学的問題 心身医学, 35, 229-233.
- 大沢周子(1989). バイリンガル・ファミリー—国際結婚の妻たち— 筑摩書房
- Ozeki, N., Ushijima, H., Knowles, A., & Asada, Y. (2006). Analyses of transcultural stress factors and the mental well-being of female foreign residents in Japan. *Japanese Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology*, 11, 141-151.
- Park, M.H., Yang, S.J. & Chee, Y.K. (2016). The revised stress measurement of female marriage immigrants in Korea: Evaluation of the psychometric properties. *Women & Health*, 56, 395-412.
- 賽漢卓娜(2011). 国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性— 勁草書房
- 佐竹眞明・ダアノイ メアリー アンジェリン(2006). フィリピン日本国際結婚—移住と多文化共生— めこん
- 石明寛・石正道・高橋文成・坂井敬造・吉田耕治・柏村正道(2004). 外国人産婦の分娩直後の心理についての研究. 産科と婦人科, 71, 239-243.
- Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- Shu, B.-C., Lung, F.-W. & Chen, C.-H. (2011). Mental health of female foreign spouses in transnational marriages in southern Taiwan. *BMC Psychiatry*, 11, DOI: 10.1186/1471-244X-11-4.
- 宿谷京子(1988). アジアからきた花嫁—迎える側の論理— 明石書店
- 総務省統計局(2015). 人口推計(平成26年10月1日現在)—全国:年齢(各歳), 男女別人口・都道府県:年齢(5歳階級), 男女別人口—< <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2014np/index.htm#a05k26-a>> (2016年5月17日).
- 鈴木一代(2012). 成人期の文化間移動と文化的アイデンティティー異文化間結婚の場合— ナカニシヤ出版
- 高井次郎(1989). 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要, 36, 139-147.
- 武田里子(2011). 村の国際結婚再考—結婚移住女性と農村の社会変容— めこん
- 譚紅艶・渡邊勉・今野裕之(2011). 在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望 目白大学心理学研究, 7, 95-114.
- 辻丸秀策・福山祐夫(2003). 多文化する多文化間ストレスと比較・社会精神医学—久留米大学病院における過去19年間の外国人受診者の動向と比較・文化精神医学およびメンタルヘルスに関する研究— 比較文化年報, 12, 1-24.
- 鶴岡章子(2008). 在日外国人母の妊娠, 出産および育児に伴うジレンマの特徴 千葉看護学会雑誌, 14, 115-123.
- 歌川孝子・丹野かほる(2008). 在日外国人の異文化ストレスに関する研究の動向—異文化ストレスの実態と地域保健活動の課題— 新潟大学医学部保健学科紀要, 9, 131-136.
- 王寧霞(2005). 日中国際結婚に関する研究 鹿児島大学医学雑誌, 56, 35-43.
- 渡辺文夫・大塚啓輔(1979). 日本における異文化間心理学の研究動向(1960-1979) 心理学評論, 22, 247-276.
- 魏薇(2015). 国際結婚家族における外国人母親の生活と子育てネットワーク 教育福祉研究, 20, 107-119
- ウ シンイン(2010). 台湾における結婚移民女性に関する動向と支援策 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50, 23-33.

- 山中早苗・中村安秀(2013). 就学前児をもつ外国人母親の社会的ネットワークと子育てに対するソーシャルサポート  
小児保健研究, 72, 97-103.
- Yang, Y.-M., Wang, H.-H. & Anderson, D (2010). Immigration distress and associated factors among Vietnamese  
women in transnational marriages in Taiwan. *The Kaohsiung Journal of Medical Science*, 26, 647-657.
- Yang, Y.-M. & Wang, H.-H. (2011a). Acculturation and health- related quality of life among Vietnamese immigrant  
women in transnational marriages in Taiwan. *Journal of Transcultural Nursing*, 22, 405-413.
- Yang, Y.-M. & Wang, H.-H. (2011b). Cross-cultural comparisons of health-related quality of life between Taiwanese  
women and transnational marriage Vietnamese women in Taiwan. *Journal of Nursing Research*, 19, 44-52.
- 横田祥子(2008). グローバル・ハイパガミー?—台湾に嫁いだベトナム人女性の事例から— 異文化コミュニケーション研究, 20, 79-110.
- 尹靖水・朴志先・鄭英祚・金貞淑・中嶋和夫(2012). 韓国の多文化家族における外国人妻の日常生活に関連した苛々  
感と精神的健康の関係 評論・社会科学, 102, 23-37.
- 吉田真奈美・春名めぐみ・大田えりか・渡辺悦子・Uayan Maria Luisa T・村嶋幸代(2009). 在日フィリピン人母  
親が子育てで直面した困難と対処 母性衛生, 50, 422-430.
- 楊文潔・江守陽子(2010). 在日中国人母親の育児ストレスに関する研究 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 33, 101-  
109.
- 鄭楊(2006). 在日中国人家庭の育児形態に関する一考察—関西在住中国人家庭の育児援助の事例から— 都市文化  
研究, 8, 72-87.

# A Review of Mental Health Research Regarding Marriage Immigrant Women in Japan, Korea, and Taiwan

Reika ICHIJO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Takashi UENO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The aim of the study is to review mental health studies regarding marriage immigrant women in Japan, Korea, and Taiwan. 1) There were 21 scholarly articles in Korea and Taiwan written in English or Japanese. 2) There were 34 articles that originated in Japan on foreign patients who visited a psychiatrist, foreign people who lived in Japan, marriage immigrant women, domestic violence victims, and foreign mothers.

The results of this literature review confirm 1) the mental health of married immigrant women is not better than that of the local women in Korean and Taiwanese studies. It is clear that these studies' subjects tend to be immigrant women from a country that has an economical gap from Korea and Taiwan; although these studies have used various scales and measures, there are still issues of reliability and validity. 2) Moreover, mental health studies about marriage immigrant women in Japan are inclined to maternal and child health domain, and there are few large-scale quantitative research.

Keywords : Marriage migrant woman, Foreign women, Mental health, Cross-cultural stress,  
International marriage